

察している。発見された患児の性別は 85% が女児であり、起病菌は 64% までが E. coli である。

これら患児の IVP 所見では 65% に腎盂拡大、または腎杯の変形のいずれかが認められた。

今回の集団検尿よりの無症候性細菌尿の検出は、蛋白、潜血を指標として検出する方法であったため、今日迄諸外国で報告された成績と比較し、きわめて低率にしか検

出されなかったのではないかと推察され、無症候性細菌尿の検出には、異なった方法を考案する必要があると考える。又、われわれの prospective な調査成績よりみても明らかな如く、小児期尿路感染症の臨床症状が多彩であり、疾患の背景に基礎となる疾患のあることが多く、これが特長であり、これらの検討が今後必要であると思う。

小 児 尿 路 感 染 症

都立清瀬小児病院 腎臓内科 伊藤 拓 長谷川 理
 青才 文江 河野 晃
 泌尿器科 川村 猛 長谷川 昭
 森口 隆一郎

I. 小児尿路感染症と慢性腎不全の関連について

53例の慢性腎不全症例について慢性腎盂腎炎の合併率を検討し、慢性尿路感染症と腎不全との関連について考察した。

腎不全の原因疾患は glomerulopathy 30例, vascular nephropathy 2例, renal hypoplasia 9例, malformation or disfunction of urinary tract 12例であった。

慢性腎盂腎炎の合併は glomerulopathy vascular nephropathy では1例のみであるが、renal hypoplasia の8例中7例及び malformation of urinary tract 12例中全例に認められている。しかし慢性腎盂腎炎のみで VUR 外の腎尿路系の異常を伴わず腎不全に至った症例は認められなかった。

慢性腎盂腎炎は先天性腎尿路奇型又は機能異常に高率に合併し、その悪化に大きな影響を及ぼすが、腎尿路系の奇型等を伴わない慢性腎盂腎炎で腎不全にまで至る症例は少なくとも小児期では少数であると考えられた。

以上の検討結果より腎尿路系の奇型を持った患児では、合併する尿路感染症の早期発見、治療がその予後に重大

な影響を与えると考えられた。

II. 腎移植患児における尿路感染症の検討

小児腎移植例16例を対象として移植後の尿路感染症合併について検討を行った。16症例の移植後35ヵ月から2ヵ月に至る現在の状態は1例が慢性拒絶反応により移植腎摘出に至った以外、全てほぼ正常の腎機能を維持しており、IVP 上1例以外著変なく、VCG では全例VUR を認めていない。

移植後尿路感染合併頻度は16例中8例に延べ36回であるが、その内容は移植前に下部尿路に異常のあった3例に28回平均9.3回と高頻度であるが、下部尿路に異常を認めない他の13例では延べ8回平均0.6回であった。

以上の結果より移植前患児の下部尿路異常が術後尿路感染症の合併の大きな因子となると考えられた。このような患児の尿路感染は起病菌も二種以上の混合感染が多く、再発性、難治性であり、移植腎の予後にも影響する可能性が危惧される。

それ故、下部尿路異常を伴う患児の腎移植においては、術前に以上の点を考慮した対策が必要と考えられた。

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

. 小児尿路感染症と慢性腎不全の関連について

53 例の慢性腎不全症例について慢性腎盂腎炎の合併率を検討し,慢性尿路感染症と腎不全との関連について考察した。

腎不全の原因疾患は glomerulopathy30 例,vascular nephropathy 2 例,renal hypoplasia9 例,malformation or disfunction of urinary tract12 例であった。

慢性腎盂腎炎の合併は glomerulopathy vascular nephropathy では 1 例のみであるが,renal hypoplasia の 8 例中 7 例及び malformation of urinary tract12 例中全例に認められている。しかし慢性腎盂腎炎のみで VUR 外の腎尿路系の異常を伴わず腎不全に至った症例は認められなかった。